

# 荀爽の卦變説について

花崎隆一郎

## 一 序説

思うに、前漢の時、卦氣説に端を發した卦變の説は、孟喜の「十二消息卦」の推移に見られるようにその成立の根本形式ではあるものの、いわば卦氣説の副次的産物であつた。この分卦(爻)直日法の根本形式として採用せられた爻變の規則的推移による卦變の方法は、京房の「八宮世應圖」において、より複雑な義例をもちつつも純粹に繼承されたものようである。その間、文王序卦の次序による焦延壽の「焦氏易林」の出現によつて、占法の基本が卦變にあることを示されたのであるが、それはまた「世爻」に占斷の根據を置く「八宮世應圖」に繼承されたものと考えられる。

このように考えるとき、京房のその圖は、孟・焦兩氏蘊蓄の開花し結實したものといえよう。而して右の卦氣説より筮占への移行を辿る卦變の説は、終に周易六十四卦の分析と綜合的構成に不可缺の要素と認められるに至つたのである。

右のような變遷を辿る卦變の説は、後漢に入り荀爽によつて卦變そのものを問題として明確に意識せられるに至つた。それは從來傍系にあつた卦變説の正統への移行といふことができよう。即ち、發端を卦

氣説と占法とに求められた卦變の説は、周易六十四卦の構成要素と認められた結果、解經上の重要な根據として變遷して行つたのである。この變遷は、三國吳の虞翻によつて更に發展し、卦變の體系化はその極に達した。後世、卦變の首唱者を荀爽とし虞翻をその完成者と目するのは、解經上卦變を説くことの極めて積極的であつたがためであらう。「古之言卦變者、莫備於虞仲翔、後人不過踵事增華耳。」(易學象數論)卷二、卦變二)という黄宗羲のことばは、その意圖はともかくとして、まことに至當なる公論である。

ここに首唱者としての荀爽の卦變説の實體がいかなる義例と定法とによつて成立しているかを檢覈考察し、更に類推敷衍してその完全な姿を窺つてみたい。

## 二 荀爽卦變説の實際

今、その卦變説の實際を示すにあたり、便宜上、張惠言の「荀氏九家義」の説に據りながら、孫堂・馬國翰の「荀氏注」と李鼎祚の「集解」とを參看して述べることにする。

先ず荀爽卦變説について張惠言の解説する全文を左に掲げてみる。  
 「荀氏注」並びに「集解」に檢して「九家注」にのみあるもの、及びその張氏

注には傍線を附した。

一陽一陰之卦。剝注云、陰外變五。夬云、大壯進而成夬。九家。謙云、乾來之坤。履云、動來爲兌。九家。動來、謂坤來。同人云、乾舍于離。坤出于離也。

二陽二陰之卦。屯自坎、蒙自艮。坎云、陽來則乾二五也。訟云、陽來居二、則亦遯來也。晉云、五從坤動而進居五、則亦觀來也。蹇・解皆云、乾動之坤。蹇又云、乾動往居坤五、則是乾二之豫爲解、乾五之謙爲蹇也。萃云、本否卦、上九見滅。

三陽之卦。隨・蠱・噬嗑・賁・咸・恆・損・困・井・旅・渙・既濟・未濟、推其注文、皆自泰・否。蓋荀言卦變、與虞氏略同。見注者二十六卦。不同虞者、蹇・解・萃三卦。而消息之義則異。荀惟以乾・坤

爲消息、而以泰・否爲升降、故一陰一陽、二陰二陽之卦、皆乾・坤相之、觀于蹇・解。可見、屯・蒙・訟・晉、雖自坎・艮・遯・觀、實亦乾之二三、坤之二四耳。卦變、皆古所傳、故荀、虞各爲之說、而不易其所來之卦。泰・否、乾・坤也。故成卦獨多、萃象乾滅、其例。大畜當配之、注闕不可知也。恆注云、乾氣下終、始復升上居四。坤氣上終、始復降下居初、則知卦變之例、皆升降以求六十四卦、皆得通之矣。〔周易荀氏九家義〕 卦變

次に右の全文の九家の説を除去して、即ち荀爽の説のみについて表示すると次の如くなる。(表示にあたっては、卦名を現行の上下經の次序に合わせ、又、張惠言の言及せざる點をも補足した。なお、「荀氏注」は主に「馬氏輯佚書」に據った。)

番	卦名	荀氏注	張氏解	本卦	卦變の種類		備考
					往來	進升降變(舍滅)	
13	同人 ䷌	象曰、天與火同人。乾舍于離、相與同居、故曰同人也。	乾舍于離、坤出于離也。	乾 ䷀ 坤 ䷁		離	荀爽は乾卦象傳の「大明終始」に注して「乾起坎而終於離、坤起於離而終於坎。離・坎者乾・坤之家、而陰陽之府。故曰大明終始也。」と言え、離は乾の終であり、坤の始である。然らば、上の荀氏注「乾舍于離」は、乾・坤の交通を意味すること明かである。焦循は「乾上之坤三。」(「易圖略」と解するが、後の虞翻説に影響されたものである。
15	謙 ䷎	天道下濟而光明。(象傳) 乾來之坤。陰去爲離、陽來成坎、日月之象、故光明也。	乾來之坤。	坤 ䷁ 乾 ䷀	三		
23	剝 ䷖	象曰、剝、剝也。柔變剛也。謂陰外變五。五者至尊、爲陰所變。故曰剝也。	陰外變五。	觀 ䷓	五		

荀爽の卦變説について

(二) 二陽二陰の卦

番	卦名	荀氏注	張氏解	本卦	卦變の種類		備考
					往來	進升降變舍減	
39	蹇 ☵上☶下	蹇利西南、往得中也。(彖傳) 西南謂坤。乾動(升二)往居坤五、故得中也。	乾動之坤。乾動往居坤五、則乾五之謙爲蹇也。	乾 ☰ 謙 ☱			孫堂・馬國翰「荀氏注」並、津逮祕書本・枕經樓藏版本「集解」は、共に「乾動」に作る。但、學津討原本・雅雨堂刊本「集解」は、「升二」に作る。(後出の備考を参照)
				升 ☶上☵下	二	五	
35	晉 ☱上☲下	順而麗乎大明。柔進而上行。(彖傳) 陰進居五。處用事之位、陽中之陰、侯之象也。 六五、悔亡。失得。(爻辭) 五從坤動、而來爲離……	五從坤動、而進居五、則亦觀來也。	觀 ☱上☲下		四 五	
29	坎 ☵	行險而不失其信。(彖傳) 謂陽來爲險、而不失中。中稱信也。	陽來、則乾二五也。	坤 ☷ 乾 ☰		五二	
6	訟 ☱上☲下	有孚。(卦辭) 陽來居二、而孚于初、故訟有孚也。	陽來居二、則亦遯來也。	遯 ☶上☷下		二三	
4	蒙 ☶上☱下	蒙亨、以亨行時中也。(彖傳) 此本艮卦也。案二進居三、三降居二、剛柔得中……	自艮。	艮 ☶		二 三	
3	屯 ☳上☵下	動乎險中、大亨貞。(彖傳) 物難在始生、此坎卦也。案初六升二、九二降初、是剛柔始交也。……	自坎。	坎 ☵		初二	

40 解 ☰ ☷	解利西南、往得衆也。(彖傳) 乾動之坤、而得衆。	乾動之坤、則是 乾二之豫爲解也。	乾 ☰ ☷	二					
45 萃 ☱ ☷	象曰、齎資涕洟、未安上也。 (上六) 此本否卦。上九陽爻見滅遷 移。	本否卦。 上九見滅。	否 ☷ ☱						上 焦循は、「是則用易林之法、所謂否之萃矣。」 (易圖略)とするが、論者はその是非を 知らない。

(備考) 今は主に張氏の解説に據るので、版本のちがいに本づくところの蹇卦が升卦を本卦とすることについては論ぜず、参考とするとどめておく。

(三) 三陽三陰の卦

番	卦名	荀氏注	張氏解	本卦	卦變の種類		備考	
					往來	進升降變舍滅		
17	隨 ☱ ☳	大亨貞无咎。(彖傳) 隨者、震之歸魂。震歸從巽、 故大通。動爻得正、故利貞。 陽降陰升、嫌於有咎。動而 得正、故无咎。	推其注文、皆自 泰・否。蓋荀言 卦變、與虞氏略 同。	否 ☷ ☱			初上	この卦の荀氏注を「馬氏輯佚書」は、卦辭 の「隨、元亨利貞、无咎。」に附するも、「集 解」並に孫堂「荀氏注」に従い、彖傳に附す。
18	蠱 ☱ ☶	蠱元亨、而天下治也。(彖傳) 蠱者巽也。巽歸會震、故元 亨也。	同右	泰 ☰ ☷			初上	
21	噬嗑 ☲ ☲	象曰、貞厲无咎、得當也。 (六五) 謂陰來正居是、而厲陽也。 以陰厲陽正、居其處、而无 咎者、以從下明上、不失其 中、所言得當。	〃	否 ☷ ☱			初五	

荀爽の卦變説について

<p>47 困 ☱☵</p>	<p>41 損 ☱☲</p>	<p>32 恆 ☱☳</p>	<p>31 咸 ☱☶</p>	<p>22 賁 ☶☱</p>
<p>險以說。(象傳) 此本否卦。陽降爲險、陰升爲說也。</p>	<p>象曰、……損而有孚、……謂損、乾之三居上、孚二陰也。……</p>	<p>恆亨无咎。(象傳) 恆、震世也。巽來乘之、陰陽合會、故通无咎。 利有攸往、終則有始也。(象傳) 謂乾氣下終、始復升上居四也。坤氣下終、始復降下居者也。</p>	<p>天地感而萬物化生。(象傳) 乾下感坤、故萬物化生於山澤。</p>	<p>象曰、賁亨。柔來而文剛、故分剛上而文柔、故小利有攸往。 此本泰卦。謂陰從上來、居乾之中、文節剛道、交於中和、故亨也。分乾之二、居坤之上、上節柔道、兼據二陰、故小利有攸往矣。</p>
<p>〃</p>	<p>〃</p>	<p>〃</p>	<p>〃</p>	<p>同右</p>
<p>否 ☷☱</p>	<p>泰 ☳☱</p>	<p>泰 ☳☱</p>	<p>否 ☷☱</p>	<p>泰 ☳☱</p>
<p></p>	<p></p>	<p></p>	<p></p>	<p></p>
<p>二上</p>	<p>三上</p>	<p>初四</p>	<p>三上</p>	<p>二上</p>
<p></p>	<p></p>	<p></p>	<p>「馬氏輯佚書」、上掲の文字失す。今、「集解」並、孫堂「荀氏注」に従い補足す。</p>	<p></p>

48 井 ䷯	无喪无得。(象傳) 陰來居初。有實爲无喪、失中爲无得也。 往來井井。(象傳) 此本泰卦。陽往居五、得坎爲井。陰來在下、亦爲井。故曰往來井井也。	同右	泰 ䷊	初五	三五	上揭象傳の八字、現行家傳になし。「集解」本に従う。
56 旅 ䷷	象曰、旅、小亨。(象傳) 謂陰升居五、與陽通者也。	〃	否 ䷋	三五		
59 渙 ䷺	王假有廟、王乃在中也。(象傳) 謂陽來居二、在坤之中、爲立廟。……	〃	否 ䷋	二四		
63 既濟 ䷾	象曰、既濟亨、小者亨也。 天地既交、陽升陰降、故小者亨也。	〃	泰 ䷊	二五		
64 未濟 ䷿	象曰、未濟亨、柔得中也。 柔升居五、與陽合同、故亨也。	〃	否 ䷋	二五		

張惠言は前に示した文中、「見注者二十六卦」(本論四十九頁参照)と注しているが、それは九家注に據った夬・履二卦を包含したものであるから、純粹の荀爽卦變説は右の二十四卦となる。この二十四卦の張氏の解説のいちいちについてはほゞ首肯せられるのであるけれども、そのうち次の二卦には補訂の必要ありと考えるのである。即ち蹇卦と解卦とがそれである。張氏はこの二卦について、「蹇・解皆云、乾動

之坤。蹇又云、乾動往居坤五、則是乾二之豫爲解、乾五之謙爲蹇也。」(同右)とするのであるが、ここにいう「乾動之坤」とは文字通りに解すべきであり、張氏の解説は穿鑿にすぎた曲解なりと考えられるのである。(もちろん蹇卦における荀氏注「乾動」は、右の表の備考欄にも示した如く、照曠蘭學津討原本と雅雨堂刊本とは共に「升二」に作り、いずれに從うべきかを明かにしないが、今は張氏に沿って「乾動」とする。)

荀爽の卦變説について

思うに右は、「乾動き坤體の二四に之つて解卦となり、三五に之つて蹇卦となる」と解すべきである。今ここに解卦荀氏注の全容を示してその證明をなし、つづいて蹇卦のそれにも及ぼしたい。(共に「馬氏輯佚書」に據る。)

解利西南、往得衆也。无所往、其來復吉、乃得中也。有攸往、夙吉、往有功也。(象傳)

④ 坤動之坤、而得衆。西南衆之象也。陰處尊位、陽无所往也。來復居二、處中成險、故曰復吉也。五位无君、二陽又卑。往居之者則吉、據五解難、故有功也。集解

天地解而雷雨作。雷雨作而百果草木皆甲宅。(象傳)

⑤ 謂乾・坤(此處當置坤字<sup>④</sup>)、交通、動而成解卦。坎下震上、故雷雨作也。解者震世也。仲春之月、草木萌芽、雷以動之、兩以潤之、日以烜之、故甲宅也。集解

④は、乾が衆の居る坤の方位(坤體)に動くことによつて衆を得て吉を得ることであり、又、

⑤では、乾・坤交通して解卦をなすを明言する。

然らば、乾動いて坤體の二四に之き解卦をなすこと自明の理といふべきである。張氏の豫卦を本卦とする説を補訂したいのはこの二つの理

(補訂) 二陽二陰の卦

番	卦名	荀氏注	張氏解	本卦	往來進升降變含滅	論者補訂文
	39 蹇 ䷦	荀氏注				
蹇利西南、往得中也。(象傳)						
西南謂坤。乾動往居坤五、故得中也。						

由による。

蹇利西南、往得中也。不利東北、其道窮也。(象傳)

⑥ 西南謂坤。乾動往居坤五、故得中也。東北艮也。艮在坎下、見險而止、故其道窮也。集解

⑥は、解卦と同じく、西南に利しきは坤卦との交通を意味するものである。その際、「往得中」を解説するがために特に「五」を強調したのであろう。この爻位を明示せぬ例は、荀氏注のうち他にも散見し別に異とするに足らぬ。たとへばすでに前の表示中にも記した坎卦象傳の「行險而不失其信。」に對する荀氏注「謂陽來爲險、而不失中。中稱信也。」の「陽來」が、張氏も言う如く「乾の二五」を指すものであったし、渙卦象傳の「王假有廟、王乃在中也。」に對する荀氏注「謂陽來居二、在坤之中、爲立廟。……」の「陽來居二」が、本卦否の二四の交換を意味するものであった。

このように考へるとき、乾動いて坤體の三五に之き蹇卦をなすこと、これまた自ら明らかであり、謙卦を本卦とする張氏の説は當然補訂せらるべきであると考えられるのである。

さて上記の證明によつて補訂した蹇・解二卦の卦變を左に表示し、周易二十四卦に對する純粹の荀爽卦變説を完成させておきたい。

40 解 三三

解利西南、往得衆也。(象傳)  
 乾動之坤、而得衆。  
 天地解而雷雨作。(象傳)  
 謂乾・坤交通、動而成解卦。

乾動之坤、則是  
 乾二之豫爲解也。

坤 三三  
 乾 三三

四二

荀氏注云乾動之坤之坤者、當是坤體、而非指豫體也。而荀氏注已言謂乾・坤交通、動而成解卦、則是乾二四之坤爲解、明也。張氏之解、非也。

(補遺) 張氏が蹇卦の本卦を謙とし、解卦の本卦を豫として解するのは、思

うに京房の「八宮世應圖」を念頭においてのことであろう。荀氏注において明確に世應を説くのは、二陽の解卦と三陽三陰の隨・蠱・恆の四卦のみであるが、「解者震世也。」と注する解卦を除いていずれも本宮卦を同じくしない。即ち、震宮歸魂たる隨卦は乾宮三世たる否卦を本卦とし、巽宮歸魂たる蠱卦と震宮三世たる恆卦とは坤宮三世たる泰卦を本卦とする。然らば荀氏注における世應は説象の際の重要な要素であるとはいへ、卦變の問題とは自ら袂別したものと考えられる。而して張氏解において之卦と本卦の本宮を同じくするのは次の五卦にすぎない。

- 一陽一陰の卦 剝(乾宮五世卦) 本卦一觀(乾宮四世卦)
- 二陽二陰の卦 屯(坎宮二世卦) 本卦一坎(坎宮本宮卦)
- 晉(乾宮遊魂卦) 本卦一觀(乾宮四世卦)
- 蹇(兌宮四世卦) 本卦一謙(兌宮五世卦)
- 解(震宮二世卦) 本卦一豫(震宮一世卦)

右のうち、屯・晉の二卦は荀氏注において、屯卦に「此坎卦也。案初六升二、九二降初。」とあり、晉卦に「陰進居五。」「五從坤動、而來爲離。」とあるので本卦の坎卦と觀卦とを知ることが張氏の解を俟つまでもない。従って世應との関連において屯・晉二卦の本卦を考える必然性はあり得ない。残る三卦のうち蹇・解の二卦については、冒頭に述べた如く世應との関連のもとに謙・豫の二卦を本卦なりと考えたのが張氏の解であり、その根拠は「解者震世也。」とする荀氏注にあるものと思われる。残る剝卦に

荀爽の卦變説について

についても世應との関連を考えることは容易であるが、これはおそらく消息に據ったものである。その理由は次の通りである。

即ち、荀氏注に云う「陰外變五」の四字は「陰ノ外ニ變ズルコト五タビナリ」と訓じ、觀卦九五の至尊の君を剝落したる卦と見るべきである。剝卦象傳の「不利有攸往、小人長也。」に對する鄭玄注に「陰氣侵陽、上至於五、萬物零落、故謂之剝也。」とあるのが參考となる。鄭玄のいう「上リテ五ニ至ル」は荀爽の「外ニ變ズルコト五タビ」であり、これを消息に充當せしめると、乾卦四月より姤・遯・否・觀と陰の外に變ずること四たびを経、五たびにして剝卦九月に至ることとなる。従って、觀卦進んで剝卦となると考え、剝卦は觀卦に本づくものとするのが張氏の解釋であろう。このように考えるとき、剝卦もまた世應との関連なしと斷ずることができよう。

論者が蹇・解二卦に對する張氏の解を曲解なりと斷ずるのは、その荀氏注全體に對する配慮の缺落ととも、上述の證明によっても明らかになく、卦變とは関連なき世應を根拠として荀氏注を解するがためである。

ここに上述の張惠言を筌蹄として求めてきた荀爽卦變説の義例について左に表示し、一應のまとめとしておく。



義例表（張氏解に據るも、蹇・解二卦のみは論者の補訂に従う）

十 辟 卦				六 子		乾 坤			本 卦	之	陰 陽	三	卦	陰 陽	卦 變 の 種 類
20	12	33	11	52	29	2	1	13							
觀 ䷓ ䷓	否 ䷋ ䷋	遯 ䷠ ䷠	泰 ䷊ ䷊	艮 ䷳ ䷳	坎 ䷜ ䷜	坤 ䷁ ䷁	乾 ䷀ ䷀	同人 ䷌ ䷌	一陽一陰						
23 剝 ䷖ ䷖						15 謙 ䷎ ䷎			二陽二陰						
35 晉 ䷢ ䷢	45 萃 ䷬ ䷬	6 訟 ䷅ ䷅		4 蒙 ䷃ ䷃	3 屯 ䷂ ䷂	40 解 ䷧ ䷧	39 蹇 ䷦ ䷦	29 坎 ䷜ ䷜							
	56 旅 ䷷ ䷷	17 隨 ䷐ ䷐	48 井 ䷯ ䷯	18 蠱 ䷑ ䷑											
	59 渙 ䷺ ䷺	21 噬嗑 ䷔ ䷔	63 既濟 ䷾ ䷾	22 賁 ䷖ ䷖											
	64 未濟 ䷿ ䷿	31 咸 ䷞ ䷞		32 恆 ䷟ ䷟											
		47 困 ䷮ ䷮		41 損 ䷨ ䷨											
變・進降	升降・往來	減・升降	往來	往來・升降	升降	進降	升降	來							荀氏注「乾舍于離」を坤の來れるものと解す。



12 否 ☷		11 泰 ☰		29 坎 ☵		本 卦	升
				3 屯 ☶		二陽二陰	
64 未濟 ☵	56 旅 ☷	47 困 ☱	31 咸 ☶	21 噬嗑 ☲	17 隨 ☱	三陽三陰	降
		12 否 ☷		11 泰 ☰		本 卦	往
				6 訟 ☶		二陽二陰	
		59 渙 ☴		48 井 ☵		三陽三陰	來
				20 觀 ☶	52 艮 ☶	本 卦	進
				35 晉 ☱	4 蒙 ☶	二陽二陰	降
							特 徵
<p>本卦と之 卦との陰 陽の交數 が等しい。</p>							

三 その類推と敷衍

以上の如き義例と定法とにまとめられる荀爽卦變説も、荀氏注による限り殘餘の卦については注文備わらず明らかにすることができない。然しながら右の論理に従うことによって、一應の類推と敷衍とを試みることは決して不可能ではない。

今、この類推と敷衍とを試みるにあたり、その考察を容易にするために、先ず三陽三陰の卦より遡り検討を加えることとする。それはそうすることによって、歸するところの本卦となる六子・十辟卦もまた乾・坤二卦に歸一することの過程を自ら明確に示すことができる

今、この「升降」についてその組合わせを示し、既出の卦にはそれぞれその卦名を記してみると次表の如くである。(既出の表示を参照されたい)

本 卦	之	初上	初五	初四	二上	二五	二四	三上	三五	三	四		
		11 泰	18 蠱	48 井	32 恆	22 賁	63 既濟	59 渙	41 損	56 旅			
		12 否	17 隨	21 噬嗑		47 困	64 未濟		31 咸				

つづいて右の空欄を充當してみると次の卦名となる。これ即ち荀氏注に説かぬ論者類推の卦である。

本 卦	之	初上	初五	初四	二上	二五	二四	三上	三五	三	四	
		11 泰						55 豐		60 節	54 歸妹	
		12 否			42 益							53 漸

考えるがためである。  
(一) 三陽三陰の卦

上記の如く三陽三陰の卦の定法は、本卦での爻位を交換して之卦とするのであるが、その際、荀氏注では「升降」と云い、又、「往來」と云う。この「升」・「往」とは、卦の下體より上體へ「升り」「往く」ことであり、「降」・「來」とは、卦の上體より下體へ「降り」「來たる」ことであって、この卦の場合、上體あるいは下體のみでの「升降」・「往來」を意味するのではない。而してこれら兩様の語は殆ど内容を同じくするものであるから、既述の如くその荀氏注に出づる頻度から考えてこれを「升降」の一語に統一着させられるように理解する。

かようにして周易六十四卦中の三陽三陰の卦二十卦のうち、本卦たる泰・否二卦を除く他の十八卦全部について検討することができたのであるが、仔細に眺めたとき、ここにまたひとつの定法を見出すのである。即ち本卦たる泰・否二卦がそうであるからには、他の十八卦すべてが陰陽相反する爻において升降しているということである。これ後に虞翻の所謂「旁通」であり、朱震のいう「錯卦」である。「旁通」とは兩卦同爻位において陰陽相反するをいい、「錯卦」とはそれら兩卦を指していうのであるが、泰・否二卦はその各々が旁通しており互いに錯卦である。而して荀氏注にこれらのことばを見出すことはできぬが、右の表による限り荀爽の意識下には把握されていたものと思われる。

右のようにして荀爽卦變説の底流にある定法たる「旁通」の法を見出したのであるが、つづいて二陽二陰と一陽一陰との卦にもこの法を敷衍して類推し検討する。

30 離 ☲☲	50 鼎 ☱☲	58 兌 ☱☱	49 革 ☱☲	19 臨 ☱☳	36 明夷 ☱☲	34 大壯 ☱☳	5 需 ☱☵
29 坎 ☵☵	3 屯 ☳☵	52 艮 ☶☶	4 蒙 ☳☶	33 遯 ☶☷	6 訟 ☲☳	20 觀 ☶☲	35 晉 ☲☱
本卦	之卦 初二	本卦	之卦 二 三	本卦	之卦 二 三	本卦	之卦 四 五

この旁通によって錯卦を求め荀爽卦變説の實體を探る手續きは、その定法の(A)として示した「乾・坤の交通により之卦とする」ところの「來」・「變」・「滅」にも敷衍することができる。張惠言が前記の文中(本論四十九頁參照)において「注闕不可知也。」としながらも、「萃象

(二) 二陽二陰の卦

表記によればこの卦の定法には(A)(B)の兩様があるが、そのうち(B)の「本卦での爻位を交換して之卦とする」ものを、荀氏注では先述の「升降」・「往來」のほか「進降」とも云うのである。而してこれらの語はこの場合、三陽三陰の卦において意味した如き上體と下體との關係ではなく、上體のみあるいは下體のみでの「升降」・「往來」・「進降」を説くもので少しく内容を異にする。今、便宜上「升降」の一語に吸収させておく。次にこの「升降」を説く既出の卦を旁通して錯卦を求め、進んで本卦を檢驗してみよう。(既出の表示を參照されたい。)

左の表は便宜上、右側に既出の卦を示し左側にその錯卦と本卦とを示したものである。左側に充當した卦はもちろん荀氏注に説かぬ論者類推の卦である。

乾滅」に對して「大畜當配之」と述べているのがその證といえよう。故にこれまた前例に従って表示を試みる。なお荀氏注では、「來」・「滅」は二陽二陰の卦において、「來」・「變」は一陽一陰の卦において説くので、一陽一陰の卦にも上記のことばを適用してひきつづき表示

する。

1 乾 ☰	2 坤 ☷	本 卦	之 卦 (來)	29 坎 ☵	30 離 ☲	本 卦	之 卦 (來)
38 睽 ☱	39 蹇 ☵	本 卦	之 卦 (來)	40 解 ☵	37 家人 ☱	本 卦	之 卦 (減)
11 泰 ☰	12 否 ☷	本 卦	上	45 萃 ☱	26 大畜 ☱		

(三) 一陽一陰の卦

2 坤 ☷	7 師 ☱	本 卦	之 卦 (來)	1 乾 ☰	10 履 ☱	本 卦	之 卦 (來)
13 同人 ☲	15 謙 ☱	本 卦	之 卦 (來)	20 觀 ☱	34 大壯 ☱	本 卦	之 卦 (變)
1 乾 ☰	2 坤 ☷	本 卦	五	23 剝 ☶	43 夬 ☱		

先に張惠言は荀爽卦變説を説くに當つて、中に九家の説を混じ、「夬云、大壯進而成夬。九家。」と云い、又、「履云、動來爲兌。九家。動來謂坤來。」(ともに本論四十九頁参照)とも述べているが、それは九家のこの説が荀爽の意圖に沿つたものと認めたがためにほかならない。これらのことばと右の論者類推の卦とを比量したとき、張氏のことばは全くその正鶴を射たものと云えよう。(6)

ここに上述の荀氏注既出の卦及び論者類推の卦と未出の卦とを分別掲載して整理し、後、未出の卦についての検討を行いたい。ただ未出

荀爽の卦變説について

の卦のうち、本卦であると類推できる六子・十辟卦に屬する卦については、後述に譲りたいと思う。

(甲) 荀氏注既出の卦

合計二十四卦の卦變を示すうち、本卦たる剝卦と坎卦との由來をも示しているから之卦は二十二卦となる。なおこれら之卦の本卦を指示するもの七卦(この七卦についての由來は説いていない)、合して本卦九卦、之卦二十二卦が既出の卦となる。

本卦—乾・坤・泰・否・觀・剝・坎・遯・艮の九卦  
 之卦—屯・蒙・訟・同人・謙・隨・蠱・噬嗑・賁・咸・恆・晉・蹇

・解・損・萃・困・井・旅・渙・既濟・未濟 の二十二卦  
右總計三十一卦

(乙) 論者類推の卦

本卦—臨・離・大壯・夬・兌 の五卦  
之卦—需・師・履・大畜・明夷・家人・睽・益・革・鼎・漸・歸妹  
・豐・節 の十四卦  
右總計十九卦

(イ) 一陽一陰の卦(二組)		(ロ) 二陽二陰の卦(三組)	
8 比 ䷇	9 小畜 ䷈	25 无妄 ䷘	27 頤 ䷚
14 大有 ䷍	16 豫 ䷏	46 升 ䷭	28 大過 ䷛
		61 中孚 ䷛	62 小過 ䷽

(備考) 上の表に附した。・の圈點については後述する。

(イ) 一陽一陰の卦

この二組四卦の卦象を以て(甲)(乙)より類似の卦を求めると、次

の三組の旁通をなす錯卦を見出すことができる。今、(甲)(乙)を分別することなく本卦によって表示する。

本卦	之卦(來)
1 乾 ䷀	13 同人 ䷌
2 坤 ䷁	7 師 ䷆
	15 謙 ䷎

本卦	之卦(變)
34 大壯 ䷡	43 夬 ䷪
20 觀 ䷓	23 剝 ䷖

既述の如く荀氏注では同人卦大象傳において「乾舍于離」と述べ、張惠言はそれを「坤出于離也」と解するのであるが、要するに乾の二

に坤の來つたものにほかならない。それは謙卦象傳の荀氏注「乾來之坤」が坤の三に乾の來つたことを意味するのと一般である。(これらの

ことは本論四十九頁の表示を参照されたい。然し「謂陰外變五」という剝卦象傳の荀氏注は消息卦(辟卦)の進行を「變」として捉えるものであって(本論四十九頁の表示並びに五十五頁の(補遺)を参照されたい)、大壯卦を本卦とする夬卦とともに少しく意を異にする。然らば消息卦ならざるたゞいまの検討の對象たる比・小畜・大有・豫の四卦は前者の例に倣うべきであらう。即ち既に附したる圈點(本論六十二頁)の如く、乾

2	坤 ☷	8	比 ☶☵	16	豫 ☱☷	15	謙 ☱☶	7	師 ☱☵
1	乾 ☰	14	大有 ☱☰	9	小畜 ☰☴	10	履 ☱☰	13	同人 ☲☵
本	卦	五	四	三	二	之 卦 (來)			

(ロ) 二陽二陰の卦

この三組六卦の卦象を以てこれまた(甲)(乙)より類似の卦を求めると、乾・坤の交通に本づくとする際・蹇・家人・解の旁通四錯卦がある。即ち、中爻の二陽二陰を初上の陽爻あるいは陰爻を以て包む卦象である。

論者は先に蹇・解二卦の張氏解に對する補訂を試み、乾動いて坤體の三五に之くを蹇卦となし、二四に之くを解卦となして、更に各々の旁通兩錯卦たる際・家人をもそれに準じて乾・坤の交通に本づくもの

の四に坤の來つたものを小畜卦とし、五に來つたものを大有卦とするとともに、坤の四に乾の來つたものを豫卦とし、五に來つたものを比卦とすることである。これを端的に云えば、定法の(A)に屬さしめるわけである。かりにこの類推が許されるならば、本卦たるべき剝・夬と復・姤との四卦を除く之卦八卦は次序正しく左の如き卦變圖となつて示され、自らなる乾・坤交通の様相を知ることができるのである。

と理解した。この補訂を敷衍すれば、乾動いて坤體の三四に之くを小過卦とし、二三に之くを升卦とし、初上に之くを頤卦とする類推が成り立つ。即ち、三卦を蹇・解の屬として理解するのである。而してこの三卦をそれぞれ旁通したものが中孚・无妄・大過の三卦であり、これら六卦ともに乾・坤の交通により齎らされたる之卦なりと考へるのである。上記のことを左に表示と圈點とによつて明確にしておきたい。



本 卦		之 卦		
1 乾 ☰	38 睽 ☱☲	三五	二四	三四
2 坤 ☷	39 蹇 ☵☶	三四	二四	二一
	40 解 ☵☲	三四	二四	初上
	62 小過 ☱☲	二一	二一	
	46 升 ☱☲	二一	二一	
	27 頤 ☶☱			

さて、右のような組織をもつと考えられる荀爽卦變説において、先に後述に譲るとしたところの本卦たる六子・十辟卦の由来についても類推し、更にそれらもまた既述の之卦とともに本體たる乾坤の二卦に歸すべき性質のものであることを類推してみたい。

先ず六子についていえば、その由来の荀氏注に求め得るのは坎卦のみである（謂陽來爲險、而不失中。）。これを張惠言のように「陽來、則乾二五也。」と解すれば、坤體へ乾の初四來って震卦となり、三上來って艮卦となること自ら明白である。且つ又これら三卦各々を旁通したところの離・巽・兌の三錯卦が、乾體へ坤の二五・初四・三上の來つたものであることも容易に類推できるのである。

次に辟卦についていえば、これまたその由来の荀氏注に求め得るのは艮卦のみである（謂陰外變五。）。而してその眞意は既に蹇・解二卦の補訂に附したる補遺に示した通りである（本論五十五頁）が、この論理を敷衍すれば九家の説なりとして張惠言の説く「大壯進而成夬。」ということばも、觀・剝二卦の錯卦として明白に理解できることであつた（本論六十一頁の（三）一陽一陰の卦の表示を参照されたい）。然らばこの張惠言が荀爽の意圖に沿つたものと認めたところの九家の表現を借用すれば、「坤進而成復、復進而成臨、臨進而成泰、泰進而

成大壯。」と云うことができよう。而してそれら各々の錯卦が乾體に本づくものであることも、これまた容易に類推することができる。

ここに少しく贅言を用うれば、否卦九五の卦辭「其亡其亡、繫于包桑。」に對する荀氏注についてである。今、煩を厭わずその全文を掲げてみる。

陰欲消陽、由四及五、故曰其亡其亡。謂坤性順從、不能消乾使亡。包者、乾・坤相包也。桑者、上元（玄）<sup>(6)</sup>下黃、以象乾・坤也。乾職在上、坤體在下、雖欲消乾、繫其本體、不能亡也。集解（馬氏韓佚書「所引」）

これは、陰の九四を亡ぼし更には九五をも亡ぼさんとする勢も乾上坤下の天地の攝理により、いかにしてもその本體たる乾體を亡ぼすことの不可なるを云うのである。ここに云う「其本體」とは、又、十二辟卦の消息の次序を考へるとき、乾體を指示すること言を俟たない。さればこそ「不能亡也。」と云うのである。然らば否卦は乾體に本づき、錯卦たる泰卦は坤體に本づくこと自ら明かである。

張氏の解が簡要にして冗長を省いたものであることは理解できるが、この否卦についての一條を缺くのは千慮の一失といえよう。

四 結 語

既に示した荀爽卦變說二十四卦の義例と定法とによって論者の類推した三十八卦(乾・坤二卦を除いて)を合した都合六十二卦について

て、その卦變圖を示すと次のようになり、すべて乾・坤二卦に吸収されることになる。上來、縷々述べ來った荀爽卦變說の結論は即ちこの卦變圖であり、逆説的にいえばこの卦變圖の論理が即ち既述の所論なのである。

A 總圖  
荀爽卦變圖(十二辟卦(十二消息卦)は坤卦に始まるので、その次序を明瞭に示すために坤體を首とした。)

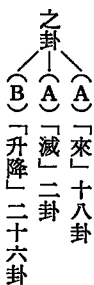
本 體		六 子		辟 卦		之		卦		(定 法)								
2 坤 ☷		52 艮 ☶	29 坎 ☵	51 震 ☳	11 泰 ☶☳	19 臨 ☳☶	24 復 ☳☶	26 大畜 ☶☰	36 明夷 ☶☱	4 蒙 ☶☱	3 屯 ☶☳	39 蹇 ☶☵	8 比 ☶☵	40 解 ☵☶	62 小過 ☱☲	46 升 ☱☵	27 頤 ☶☱	(A)・「來」
																		(B)・「升降」
																		(B)・「升降」
																		(A)・「減」

荀爽の卦變說について

1 乾 ☰										
58 兌 ☱ 30 離 ☲ 57 巽 ☴										
33 遯 ☶ 44 姤 ☵						43 夬 ☱ 34 大壯 ☳				
6 訟 ☱		49 革 ☱	50 鼎 ☱		38 睽 ☱	14 大有 ☱	5 需 ☱	41 損 ☱	22 賁 ☱	18 蠱 ☱
					37 家人 ☱	9 小畜 ☱		60 節 ☱	63 既濟 ☵	48 井 ☱
					61 中孚 ☱	10 履 ☱		54 歸妹 ☱	55 豐 ☱	32 恆 ☱
					25 无妄 ☱	13 同人 ☱				
					28 大過 ☱					
(B)・「升降」		(B)・「升降」			(A)・「來」			(B)・「升降」		

(定法)					
	(A)・「來」				
(A)・「變」	23 剝 ䷖	20 觀 ䷓	12 否 ䷋		
		35 晉 ䷢	31 咸 ䷞	47 困 ䷮	17 隨 ䷐
			56 旅 ䷷	64 未濟 ䷿	21 噬嗑 ䷔
			53 漸 ䷴	59 渙 ䷺	42 益 ䷩
				(B)・「升降」	(A)・「減」

(備考) 定法の統計



合計六十二卦(除乾・坤)

B 細密圖

凡卦皆從乾・坤生之圖

一、一陽一陰之卦十二、從乾・坤而直生

- ䷑ 7 師 乾來坤二
- ䷋ 15 謙 乾來坤三
- ䷌ 16 豫 乾來坤四
- ䷇ 8 比 乾來坤五
- ䷌ 13 同人 坤來乾二
- ䷉ 10 履 坤來乾三
- ䷈ 9 小畜 坤來乾四
- ䷍ 14 大有 坤來乾五

二、二陽二陰之卦十八、從乾・坤而直生

- ䷗ 24 復 乾變坤初
- ䷗ 43 夬 乾變坤從初至五
- ䷗ 23 剝 坤變乾從初至五
- ䷗ 19 臨 乾變坤初二
- ䷗ 51 震 乾來坤初四
- ䷗ 27 頤 乾來坤初上
- ䷗ 33 遯 坤變乾初二
- ䷗ 57 巽 坤來乾初四
- ䷗ 28 大過 坤來乾初上

苟爽の卦變説について

☰☷	46 升	乾來坤二三	☷☰	25 无妄	坤來乾二三
☰☷	40 解	乾來坤二四	☷☰	37 家人	坤來乾二四
☰☷	29 坎	乾來坤二五	☷☰	30 離	坤來乾二五
☰☷	62 小過	乾來坤三四	☷☰	61 中孚	坤來乾三四
☰☷	39 蹇	乾來坤三五	☷☰	38 睽	坤來乾三五
☰☷	52 艮	乾來坤三上	☷☰	58 兌	坤來乾三上

三、二陽二陰之卦六、從坎・離・艮・兌・臨・遯而生（此六卦各本乾・坤）

☷☵	3 屯	坎二降初	☷☵	50 鼎	離二降初
☷☵	4 蒙	艮三降二	☷☵	49 革	兌三降二
☷☵	36 明夷	臨二升三	☷☵	6 訟	遯二升三

四、二陽二陰之卦六、從乾・坤・泰・否・觀・大壯而生（泰・否・觀・大壯之四卦亦各本乾・坤）

☰☰	34 大壯	乾變坤從初至四	☷☷	20 觀	坤變乾從初至四
☰☰	26 大畜	泰上六見滅	☷☷	45 萃	否上九見滅
☰☰	5 需	大壯四升五	☷☷	35 晉	觀四升五

五、三陽三陰之卦二十、從乾・坤・泰・否而生（泰・否亦本乾・坤）

☰☰	11 泰	乾變坤從初至三	☷☷	12 否	坤變乾從初至三
☰☰	32 恆	泰初升四	☷☷	42 益	否初升四
☰☰	48 井	泰初升五	☷☷	21 噬嗑	否初升五
☰☰	18 蠱	泰初升上	☷☷	17 隨	否初升上

☰☰	55 豐	泰二升四	☷☷	59 渙	否二升四
☰☰	63 既濟	泰二升五	☷☷	64 未濟	否二升五
☰☰	22 賁	泰二升上	☷☷	47 困	否二升上
☰☰	54 歸妹	泰三升四	☷☷	53 漸	否三升四
☰☰	60 節	泰三升五	☷☷	56 旅	否三升五
☰☰	41 損	泰三升上	☷☷	31 咸	否三升上

注 (1) この間の事情については、拙稿「卦變の源流について」（北海道中國哲學會發行「中國哲學」第十一號所收）に、やや詳しく論じておいた。

(2) ここに「便宜上」というのは、馬國翰も「張氏惠言、輯荀氏九家佚文具載、而雜入九家中。」（玉函山房輯佚書「周易荀氏注序」と指摘する如く、張惠言の輯佚したものは、荀爽の説を九家の中に雜入させており、純粹の荀爽説を捉えるには甚だ不便であるがためである。然し純粹の荀爽説を抽出するのは比較的容易であり、こと卦變に關しては卓説多く裨益されるところ多しと認められるがために、敢えてその説に據ることとしたのである。なお、卦變に關して引く荀氏注のことばは「馬氏輯佚書」などに照らして全く合致している。然し、張氏解には一部曲解と思われるものがあり（蹇・解の二卦）、又、觸れるべくして觸れていない卦（否卦）もある。これらについては本論において論述の對象とした。

(3) 「馬氏輯佚書」には「坤」の字がない。今、「集解」並びに孫堂「荀氏注」に従い「坤」の字を置く。

(4) 蹇卦が西南に利しきの卦であるがためには、本論の如く必ずや坤體を豫想せねばならぬ。これについての朱子の次のことばは一見雜駁に似てその實含蓄ある鋭い觀察を示している。

蹇利西南、是說坤卦分曉。但不知從何插入這坤卦來。此須是簡變例。聖人到這裡、看見得有箇做坤底道理。大率陽卦多自陰來、陰卦多自陽

來。震是坤第一畫變、坎是第二畫變、艮是第三畫變。易之取象、不曾確定了也。〔語類〕卷七十二、晏淵錄)

右の傍線部を見れば、蹇卦の上下體ともに坤體を豫想した朱子の柔軟な態度を窺うことができる。

- (5) 荀氏注において、この「旁通」「錯卦」の法を顯著に用いているのは、一陽の卦たる謙卦の象傳「天道下濟而光明。」に對する次のことばである。

乾來之坤。陰去爲離、陽來成坎、日月之象、故光明也。

これは既に本論四十九頁に表示した如く、本體たる坤卦に乾の九三の來ったものであるが、もしこれを旁通して本體乾卦に坤の六三を來らしむるならば、一陰の卦たる履卦となる。而して履卦の二三四は離であり、謙卦の二三四は坎である。このことを荀爽は「陰去爲離、陽來成坎。」と説き、さればこそ「日月之象、故光明也。」と説象するのである。この謙・履二卦の二三四を取象の根據とするのは所謂「互體」の法であり、明かに鄭玄の影響下にあるものと思われるが、鄭注の具備せぬ今日においては質すべくもない。ただここに、荀爽の意識下に「旁通」「錯卦」の法の把握がなければ、たとえはこの謙卦象傳の注の如き説き方の不可なるを附記しておく。

- (6) 更に繫辭上傳の「陰陽之義配日月。」についての荀氏注「謂乾舍於離、配日而居、坤舍於坎、配月而居之義、是也。」においていえば、前者はもちろん同人卦を思っておこさせるのであるが、後者はその旁通の錯卦たる師卦を豫想させる。これを以て論者が同人卦より師卦を類推することにも亦虚妄ならざるを證することができる。

- (7) 張惠言はこの「二五」について、別に「二五、中氣、即太極。非爻名。」(繫辭上傳「是故易有太極、是生兩儀。」の虞氏注「乾二五之坤」に對する張注)と云う。従って、この場合にも「二五」とは爻位を指示するのではなく、「太極」より發したる「中和の氣」をいうのであり、初四・

- (8) 三上の交通をも「二五」の語を以て「中氣」の交通を象徴することとなる。論者の類推と異なるので敢えて注記する。  
集解本「玄」に作る。